特集 多様化する英語の授業

学ぶ喜びを感じる選択授業

―個に応じた言語活動を通して―

関口和弘
（横浜市立大正中学校）

1. はじめに

“Hello，Mr Sekiguchi.”と，目を輝かせながら英語教室に入ってくる生徒を見るたびに，選択授業の大切さを実感する。外国語が必修教科となったことは喜ばしいことである。しかし，授業時数が週3時間となったことは，基礎学力を養う上で，大きな痛手である。実際には，学校行事等で，週3時間の授業でさえ確保できないことも少なくない。そのような中，選択教科としての英語の学習は，教師にとっても生徒にとっても「救いの時間」であると感じている。

選択教科としての外国語においては，生徒の特性等に応じて，多様な学習活動を展開することが求められている。課題学習，コミュニケーション能力の基礎を培う補充的な学習，発展的な学習など，子どもの実態に即した様々な学習内容を各校で工夫していく必要がある。学校の独自性や教師の創造性が問われることになる。

2. 横浜市の動向

横浜市の教育は，「自分で自分の生き方を切り拓いていく子ども」をはぐくむことを目指している。選択教科は，そのために重要な役割の1つを担っていると言える。

昨年度行われた市内中学校へのアンケートによると，選択教科においては，必修教科と同じ評価の観点を設定している学校が多い。そして，必修教科と比べ少人数で授業が展開されている傾向にあり，子どもの興味・関心に応じた授業が工夫されている。現在報告されている選択教科の授業内容は，主に次のように分類することができる。

○語彙や文法事項など，コミュニケーションの基礎となる言語材料のドリル練習を行う。
○教科書での既習事項を活用し，コミュニケーション活動を行う。
○英検などの検定試験に向けての学習に取り組む。
○副教材を活用して，4領域を総合的に学習する。
○特定の領域を重視した学習を行う。（視聴覚機器を利用した「聞く」活動，教科書以外の読み物を「読む」活動など。）

3. 本校の実践例

英語学習に興味を持っている生徒や，英語学習に必要性を見いだしている生徒が英語を選択していることが多い。そのため，生徒の学習意欲は高い。さらに本校においては，8～16名の少人数で授業展開をしているため，正に「個に応じた」授業となっている。授業内容としては，補充的な要素，発展的な要素，課題学習的な要素を，すべて兼ね備えているような学習活動を工夫している。

（1）2学年の例～豊かな表現力を養う授業～

① 全身を使った音読による表現活動

教科書以外の教材を活用して，音読に取り組んでいる。その際，『からだを揺さぶる英語入門』（斎藤孝著，角川書店，2003年）を参考にしている。生徒がすでに *NEW CROWN* で親しんでいる“Humpty Dumpty Sat on a Wall”に始まり，“The Wizard of Oz”“I Have a Dream”“The Gettysburg Address”などの音読に挑戦してきた。容易なものから導入し，徐々に中学生の成長段階に合ったメッセージ性の強い名文に挑戦している。音読練習は，次のような手順で進めている。

CDの模範朗読を聞く→内容を解釈する→教師の

後について，数回リピートする→個人で音読練習をする→グループで円になり，声を合わせて音読する→教室を歩きながら，個人で音読する→各自の音読を発表する→全員で大きな輪を作り，声を合わせて音読する

基本的に，音読練習は立った姿勢で行う。最後は，声の響き合い，心の響き合いを目指す。次は，自己評価表に記入された生徒の感想の一部である。

・歩きながら読むと，楽しくリズムに乗って読める。気持ちも込めやすい。
・全員で音読したとき，皆の声が本当に身体に響いたように感じた。

② 基本表現を活用したスキット

ベストセラーとなっている『ベラベラブック』（ぴあ，2002 年）を活用している。これは，生徒が親しみやすい教材である。場面ごとに短いキーフレーズがカード形式になっている。一方に英語表現，他方にその表現が使われる状況と意味が日本語で書かれている。次のような手順で，毎時間 10 個ずつ表現を覚えるようにしている。

キーフレーズの使用場面と意味を理解する→全体で発音練習をする→個人で覚える→ペアで練習する→全体で確認する→その日の表現を用いたスキットを短時間でつくる→ペアでスキットを発表する→全員がそれぞれのペアにコメントを述べる

生徒は毎回楽しみながらキーフレーズを学んでいる。教室外で会ったときにも，学んだ表現を使ってにこやかに声をかけてくる生徒もいる。

（2）3 学年の例～総合的に基礎力を養う授業～

3 学年の選択授業は，7 ～ 8 名ずつの少人数集団で行っている。座席は，円形にしている。友だち同士の顔が見えることによって，生徒同士に連帯感が生まれ，コミュニケーションへの意欲が向上すると考えているためである。

① インタビュー形式のコミュニケーション活動

教師が毎回テーマを与え，その内容に関して最も大切な情報を 3 文ずつ語る。ここで多くを語らせないことがポイントである。それぞれの生徒に，他の生徒が順番に 1 つずつ質問をしていく。生徒は「何を語るべきか」「何を質問すべきか」を，メモを活用して短時間で判断しなければならない。このような即興性が必要とされる活動に継続的に取り組んでいくことによって，コミュニケーション能力の基礎が養われてくると考えている。

次は，「自己紹介」というテーマを与えたときの展開の一例である。

S1 : I'm Kazuya. I'm a member of the badminton club. I play it every day.
S2 : Is badminton an easy sport?
S1 : No, it isn't. I think it's a hard sport.
S3 : Why do you play badminton?
S1 : Because I like it. It's hard, but fun and exciting. I want to be a good player. ＜以下省略＞

② 4 領域を統合した「補充・発展学習」

副教材として，『英語の楽習 BOOK 2』（正進社）を活用している。このテキストでは，ページごとに生徒が親しみやすいコミュニケーションのトピックが設定されている。また，4 領域を統合した活動を通して，言語材料の復習ができるように工夫されている。さらに，トピックの内容については，debate や discussion などにつなげ，発展性のある扱い方を心掛けている。

4. おわりに

本校では，少人数による選択授業が，生徒個々のコミュニケーション能力の育成に大きく影響を及ぼしていると言える。生徒も毎週の授業を楽しみにしている。今後，授業内容を考えていく際には，「こんなことを学んでみたい」という生徒の要望も積極的に取り入れていきたいと考えている。

またアンケートから，全市的にも，「子どもの選択教科への興味・関心が高まってきている」ことが，成果として報告されている。問題としては，教員数の関係で，生徒の希望に応じるだけのコースを設定することが難しいなどの課題が挙げられている。

今後ますます，選択英語の授業内容に関する情報交換が盛んに行われ，よりよい選択授業の在り方を共に考える機会が増えてくることを期待している。

【参考文献】
○文部省『中学校学習指導要領（平成 10 年 12 月）解説外国語編』東京書籍，1998 年
○横浜市教育センター『平成 14 年度よこはまカリキュラム』2003 年